

# 報 雜

553. 94 : 550. 8 (521. 16)

## 京 都 府 共 盛 炭 鑛 調 査 速 報

1. 【要約】 夾炭層は洪積層に属し、片麻岩状花崗岩からなる基盤の小窪地に堆積したものである。炭層は2枚あつて、周縁部は薄く且擾乱されているが、中心部は安定しその平均厚さ72cmである。木質亜炭を主とし、炭質良好であつて、その推定埋蔵量は19,400 吨でこの50%が可採炭量となる。地域の東部に於ける炭層の賦存状況が明瞭でないから、附図に示した位置に試錐を行うと共に、現在の坑道を更に掘進して東部の炭層賦存状況を明かにし、推定埋蔵量の確認することが緊急である。

2. 【緒言】 昭和23年4月13日共盛炭鑛の概査に従事した。茲に其結果を報告する。

3. 【位置、交通】 本炭鑛は京都府相樂郡高山村田山にある。関西本線大河原駅から縣道を南へ約6kmで高山村田山に至る。こゝから山元迄南西に約700mは目下自動車道路を新設中であるから、完成の上は交通運搬ともに比較的便利である。

### 4. 【地形、地質】

調査地は縣道との比高50m内外の丘陵山地であるが、稍々複雑な起伏を呈する。本地域を構成する地質は下位より順次に基盤の片麻岩状花崗岩、之を不整合に被う相樂層、更に不整合に被覆する北又層に分けられ、谷の低地に沖積層が分布する。相樂層は主に粘土層から成り、砂層を含み、亜炭層を挟有し、厚さ5m乃至10mある。北又層は主に砂礫層から成り厚さの変化著しく3m乃至30mある。これらの地層は基盤の小窪地に堆積し、浸蝕によつて島状に取残されたものである。

5. 【炭層】 炭層は相樂層の粘土層に挟有され主要炭層は地域の周辺に於ては薄く、且擾乱されているが、中心部は安定する傾向がある。坑内及び露頭に於ける炭層の關係を示せば、下図の通りである。

炭層は殆ど水平に発達し、僅に西方に傾斜する。夾炭層の賦存区域及び露頭の位置は、附図に示す通りである。

### 6. 【炭質】

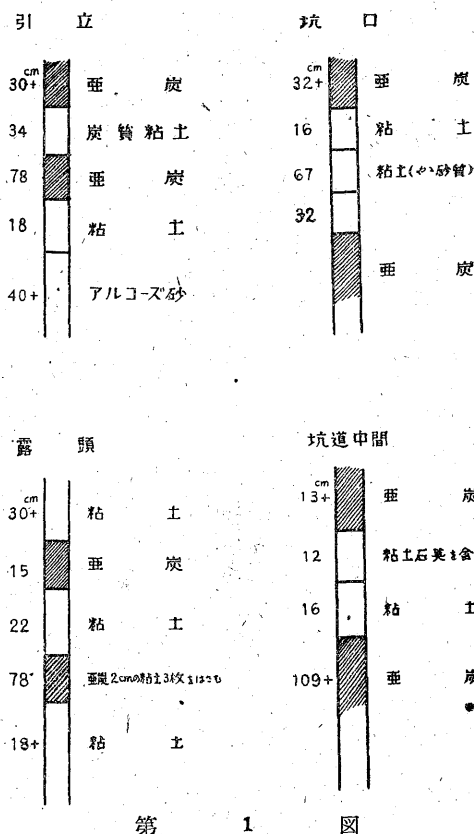
主として、木質亜炭で隣接の日章炭鑛のものと酷似する。(発熱量は3,500~4,000カロリーと推定される)

### 7. 【炭量】

附図に示す如く推定賦存面積を22,500m<sup>2</sup>、平均炭丈を72cm、比重を1.2として算出すれば、推定炭量は19,400 吨である。其50%が可採炭量となる。

### 8. 【結論】

本地域の東部における炭層の賦存状況が明瞭でないから、早急に図示の位置において試錐を行うと共に、現在



第 1 図

の坑道を掘進し炭層の賦存状況を明かにして推定炭量19,400 吨と確認する事が必要である。

### 9. 【現況】

- (イ) 鑛区 京都府 試登4764号、試登4763号
- (ロ) 位置 京都府相樂郡高山村田山
- (ハ) 鑛業権者三重縣上野市丸ノ内沢田稔
- (ニ) 沿革

現鑛業者沢田稔が昭和22年10月本鑛区を大阪市東区京橋3ノ75 中島要一より譲受け直ちに着手稼行して現在に至る。

### (ホ) 出炭

目下道路を新設中であつて出炭していない。山元貯炭200 吨内外ある。(福井三郎)

長崎縣北松浦炭田白ノ浦地區調査

昭和 25 年 2 月及び 3 月, 松本隆一, 沢田秀穂(各 40 日間調査), 久保恭輔, 長濱春夫(各 30 日間), 岡田健次(15 日間) の 5 名は上記北松浦炭田白ノ浦地区の地質調査に従事した。其結果は目下整理中であるが, 現在迄にえられた結果を次に述べる。

なお本地域は北松浦炭田の南西部を占め, 昭和 24 年春, 沢田, 佐藤茂, 一杉武治, 井上絢夫の 4 名が地質概査を行い, 早急に精しい地質調査を行う必要を認めた区域である(第 1 図)。本域西隣は昭和 24 年秋及び昭和 25 年春本所の安原彰一, 小西泰次郎, 高井保明, 原田種成が地質精査を行い, 又南隣九十九島の大部分は 1947 年松本が地質概査し, 昭和 24 年夏岡田健次が地質準精査を行つた区域である。

1. 従来小佐々断層とよばれた断層(1949 年沢田等の口ノ里断層)は竹田~大石を経, 小佐々浦中を縦走し永ノ島北西肢を通過する。

2. 佐々川断層は國鉄白ノ浦線佐々川鉄橋の西側附近から黒石新田部落に至り東西方向の断層のため西方に轉位し, 白ノ浦を縦走, 黒島とその東の大瀬半島(仮称)との間を南北に通過すると考える。

3. 上記佐々川断層を轉位せしめた東西方向の断層(昭和 24 年沢田等の芳ノ浦断層の西部延長と考える)は佐々川断層と合体すると思われる黒石新田を通過する北々東~南々西方向の断層(昭和 24 年沢田等の平野断層)によつて南に轉位し高崎山北方鞍部を通過, 西南西走し, 永ノ島, トコイ島間, 餓鬼島, 高島間を通過すると考える。

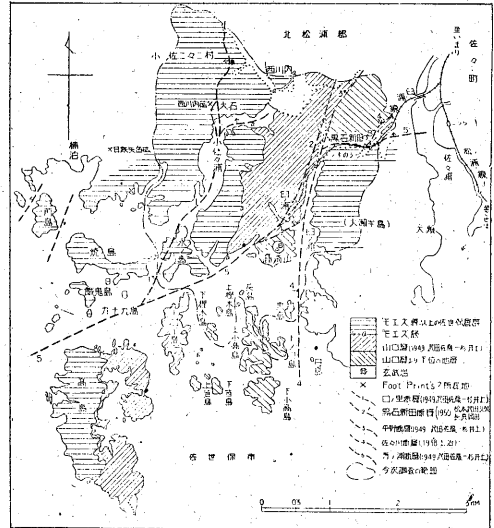
4. 平野断層の西側には之と略々平行して更に一つの断層が存在し, 之を黒石新田断層と名づける。

5. 白ノ浦半島南岸に於ける観察によれば, 所謂モエズ層下約 220m の間の地層は主として砂岩から成り良好な炭層は見出されていない。

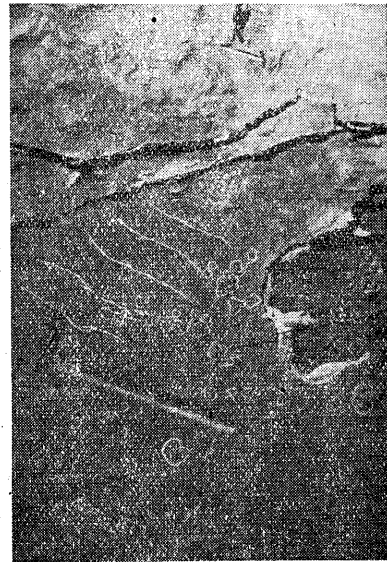
6. 平野, 芳ノ浦, 佐々川の三断層により囲まれた黒石新田北方の区域には凝灰質泥岩が分布し海棲貝化石, 「介管」(砂管状のもので石灰質の膜が円筒形をなし, 西彼杵炭田大島地区の層に含まれるものに類似する) 等が見出されている。かかる岩相は昭和 24 年沢田等の報告する迄北松浦炭田に於てはあまり注目されなかつた。

7. 芳ノ浦, 佐々川両断層によつて挟まれた高崎山一下小高島~高島を結ぶ地域には昭和 22 年松本が報じた如く所謂大瀬五尺層以下の地層が西に向つて單斜し, 唐津炭田の所謂畑津頁岩, 畑津砂岩, 行合野砂岩, 佐里砂岩に岩相の似た地層が露出し, Pecten 其他の海棲貝化石をえた。而して之等の地層は, 前記佐々川断層の白ノ

浦中を南北走する部分に接近した黒島及び高崎山に於て北方に沈降する背斜構造を成しているのが認められる。もし之等の地層が唐津炭田の上記諸層に対比されるもの



第 1 図



第 2 図

とすれば, 本地域の一部には地下比較的浅処に芳ノ谷層に相当する地層の存在が考えられる。

8. 調査地域西隣の日鉄鉱業矢岳礦南方畑崎半島の海岸に陸棲哺乳類の足跡の疑いある痕跡を認めた。(第 2 図)(松本隆一, 沢田秀穂, 久保 恭輔, 長濱春夫, 岡田健次)

山口縣船木町奥畑京正地區無煙炭鑛區調查報告

1. 【調査の趣旨】 船木町有煙炭地区に近接する三疊紀層中に優秀な無煙炭層を発見し、試掘願を提出したので、開発課の意見により一應現地を調査したものである。

2. 【地質及び炭層】 三疊紀砂岩頁岩の互層があり、植生、沖部等の無煙炭地区と同様の地質地帯で所謂厚保統(下部三疊紀)に属する地帯である。この層に殆んど平行に石英斑岩の侵入があり、北70°東の方向に走っている。地層は北70°東から北85°東の走向をなし、傾斜は北に30°乃至45°である。

炭層は数條あるが、(第三紀層との地層境界線より中生層内約1kmの間に4條あり)稜行の対称となるのは、第2條目の現試掘炭層のみで他の2層(1條の鉞区外)は、15cm~20cmで問題にならない。炭層厚さは、2mあるが、炭層に沿う断層破碎作用のため完全に粉炭となり、炭質頁岩を混入するため、品質悪く恐らく2,000カロリー台のものと思われる。

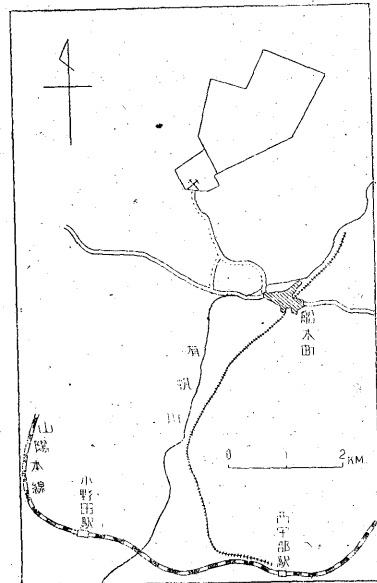
層の延長は東部は沖積層に覆われて不明であるが、西部は約10mの道路側露出に於いて60cm位となつているので、相当膨縮の強い事を予想し得られる。炭質発熱量は分析中であるから其完了後再検討する。

3. 【出願者】 宇部市上町四丁目 平 田 薫

4. 【位置及び交通】 船木町より西北約3kmにして現地に達するが、内2kmは沖田炭鉞道路でトラックを通じ、残りは馬車を通ずる程度である。

5. 【結論】 まだ露頭より5mも入りおらぬため、現

在の炭質は悪いが、4,000カロリーは保ち得るであろう。埋藏量を計算する程度の調査は行つていないから不明であるが、試掘箇所幅は6尺もあり、稜行の対称として



第1図 船木町奥畑京正無煙炭鉞区位置交通図

は充分試掘の價值あるものと思う。但し現下の無煙炭情勢では企業化には相当調査完了の後でなければ、着手を差控えるべきであろう。(昭和24年4月)(加藤 信)

山口縣宇部炭田、萩森炭鑛試錐位置並に錢ヶ原炭鑛(有煙)石炭賦存狀況概査

1. 【要旨】 萩森炭鉞の試錐位置調査及び錢ヶ原炭鉞の石炭賦存狀況を調査した。萩森炭鉞試錐選定の爲には、一應当鉞区内の地質構造を知る必要があるため、鉞区内を一巡したが、炭鉞側の要望地点より他には適当な処がないようである。

錢ヶ原鉞区内の炭層賦存狀況は大略北45°東の走向を示し、鉞区内の南半には炭層の賦存が認められる。北半にては(略船木、厚狭間國道北)、中生層の露出があつて、炭層の賦存は認められない。

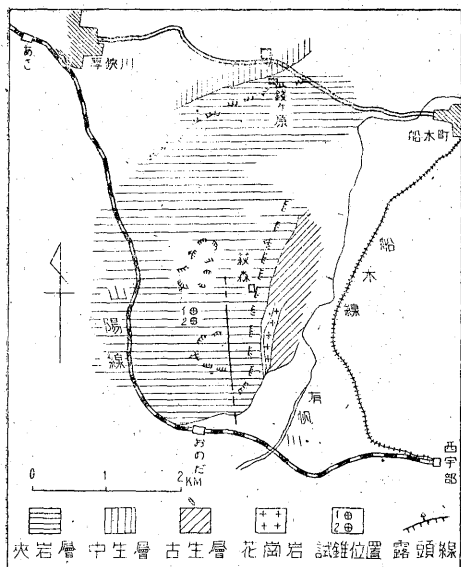
2. 【位置及び交通】 萩森炭鉞にて試錐地点として要望される処は、新斜坑延長線上の道路三叉路附近の水田中で、之を第1とし第2は其南方600m余の地点で共に馬車を通じうる道路脇である。

錢ヶ原炭鉞は山口縣厚狭郡船木町逢坂にあつて、山陽線厚狭駅下車、厚狭一船木間のバスを通ずる國道沿いで、

新斜坑は國道南方km余の用水溜池西岸附近にあつて、現在國道より道路開設中である。現在は山元から山頂附近を西に通ずる自動車道により、厚狭駅に搬出中であるが、路面甚だ悪く雨天及び雨後の搬送は困難である。

3. 【地質】 錢ヶ原炭鉞事務所附近(國道より南へ200m入る)には既に中生層と思しき砂岩頁岩の累層が露出し、國道北部には花崗岩の露出地帯もあり、炭田は國道南方の丘陵中腹より南方に向つて拡がる。而して丘陵中腹以下沖積層の下が中生層であるが、夾炭層であるかはなお詳かでない。夾炭層の走向は略々北45°で其周辺部では30°位迄に傾斜を増すが、中央部に向つて少し離れると極く緩かになり、水平乃至3度東南の傾斜を示す。

岩石は砂岩、頁岩の互層で、炭層は四層以上挟まる様である。なお夾炭層下部附近には、厚い灰青色含礫頁岩



第1図 荻森銭ヶ原地区地質略図

層があり(荻森地区に良く露出する),本地区でも当該層位と思われる附近における試錐(上総掘)の結果を聞くと,其灰青色頁岩の存在がうなずかれる。之は試錐に依つて下位の炭層を探る場合,附近の層位を指示するものとして留意すべきである。地質構造上特に甚だしい断層褶曲等は本調査に於て見受けなかつた。唯夾炭層下部附近の地層が其露頭附近に於て急傾斜を示し,炭田中央部に於いて殆んど水平を保つ事は,(勿論荻森地区の略々中央には南北性の一大断層が存在して附近の夾炭層が大いに変動をうけている例外は有るが)本炭田の地質構造

#### 北海道天北炭田小石地区調査

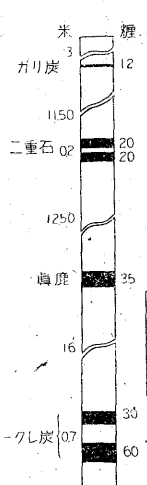
【要旨】本地区は北海道宗谷郡猿拂村小石部落の北西方に在つて,天北炭田の北部に含まれ,面積約10km<sup>2</sup>ある。夾炭層の地質時代は明かでないが,四屈の地質状況其他より推して新第三系に属すると考える。夾炭層は厚さ120m以上あつて,之に含有される主要炭層5層を数え,現在の稼行炭層は2層である。上炭層の厚さ平均炭丈1.80m,下炭層の厚さ平均炭丈5.00mある。夾炭層は走向南北乃至北10°西,傾斜は全体として西に5度乃至20°であるが,略々南北に近い走向の小石断層によつて繰返し広く分布し,該断層の東に同走向の小向斜構造がある。

石炭は褐炭に属し,灰分少く,発熱量4,700カロリー内外であつて,家庭用,暖房用,工場汽罐用に適する。

調査地内に於て藤田鋳業会社稲垣炭鉱及び北海道石炭拓殖会社に属する旧新炭鉱,旧北炭鉱が稼行し,終

に關連する何かを意味するものと思われる。

#### 4. [炭層] 炭層は4層以上あるものと推察され,上



部より「ガリ」炭(厚さ10cm内外)其下位11mに「二重石」(厚さ40cm内外)があり,炭層は2枚に分れて間に薄き夾みがある。其下位12m内外に約35cmの「眞鹿層」がある。其下位16m附近に「ノークレ炭」が有る。炭層は上下2枚に分れ計90cmあつて,間に70cmの夾みがある。現在は上部の「二重石」を採掘中である。

現在採掘する附近は露頭近く炭質は良質とは云いきいが,深部にては良好になるものと思料す。

#### 5. [結論] 荻森炭鉱の試錐位

第2図 銭ヶ原斜坑 置に就いては,炭鉱側の要望地点に於ける炭柱図に異論はないが,地質構造上「四重石炭」の賦存は疑を挟まない処でむしろ贅沢の感がある。然し本地域は新斜坑により立証された様に,夾炭層基盤である蛇紋岩乃至古生層中生層等の波状起伏が予想され,其凸部に於いては時により炭層の欠如があるものと思われる。銭ヶ原炭田の南半は炭層よく発達するようであるが,概して薄層で而も炭田は凹凸はなほだしい細長きもので,隣接炭田との談合で相互に凹凸を無くす事が出来得れば,採炭上の利益,引いては増産に益する事は甚しいと思う。本地区は近い中に調査する予定である。(清原清人)

戦前後より出炭している。

調査班員 班長山口定,調査員 河野迪也,採掘調査員 金子文郎,測量員 小谷野長平,測量員 高木芳丸  
調査期間 自昭和22年9月6日,至昭和22年10月13日,調査実日数32日間

【地形】本地区は宗谷山脈東麓の緩傾斜の丘陵地であつて,最高120m内外である。宗谷山脈に発する鬼志別川は調査地の南部を東に蛇行して直距10km余のオホツク海に注ぐ。地層が略々南北の走向を以て延長するに對し諸河流は概ね西より東に流れるのであるが,地形が緩慢であつて広潤な溪谷をなし,谷間に地層及び炭層の露頭が殆ど見られない。調査地域は緩慢な丘陵地であるが,高さ2m内外の「根曲り竹」が密生し,部落附近以外は踏破困難であるから奥地の石炭は現在は積雪時に雪上を馬櫃で運搬するのみである。

[地質]

a. 層序, 其他

本地域を構成する地質は四囲の地質及び構造より推定して、主として新第三系より成ると考える。火成岩は見当らない。柱状図(1)に当地域の模式柱状図を示す。なお夾炭層は炭層の上, 下に植物化石が見られるのみで、

地層名	厚	柱状図	岩質
段丘堆積物 (不整合)	十米		砂, 礫, 粘土
新第三系 小石夾炭層	百十米		主として青灰色の硬い砂岩より成る。炭層の若いものが互層がある。
新第三系 青色泥岩層	六十米		主として青色砂岩より成り泥岩と挟み層がある。
新第三系 黒色泥岩層	百十米		主に黒色泥岩より成り砂岩の薄層と挟み層がある。

第1図 地質模式柱状図

動物化石がない。

b. 地質構造

地層の走向は一般に南北乃至北10°西, 傾斜10~20°西である。当地域は渡辺久吉技師の調査した小石西方を南北に走る向斜構造の東翼に当り, 全般に西に向う單斜構造を示し, 夾炭層は小石断層(小石部落及び稻垣炭砒正變坑を過り走向北25°西の正断層)により繰返し広く露出して居る。断層の東側は略々南北に走る小背斜があるが, 全般として西に向い單斜構造を示して居る。

c. 夾炭層

主として青灰色の硬い泥岩より成り, 本岩は風化すれば灰褐色を呈し, 脆く, 小片に割れる。主要炭層5層ある。炭層の上, 下盤に近くはげる青灰色泥岩中に

植物化石を多産する。炭層は白色又は青白色凝灰質砂岩を夾みとして挟有する。植物化石より地質時代を判定出来ないが, 四囲の地質状況から本夾炭層は新第三系に属すると考える。

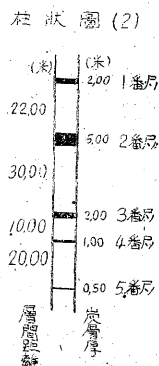
[炭層]

a. 炭層数

柱状図(2)は本地区の模式炭柱図であつて主要炭層5層ある。

b. 稼行可能の炭層

各炭層に就て標準的炭柱図を柱状

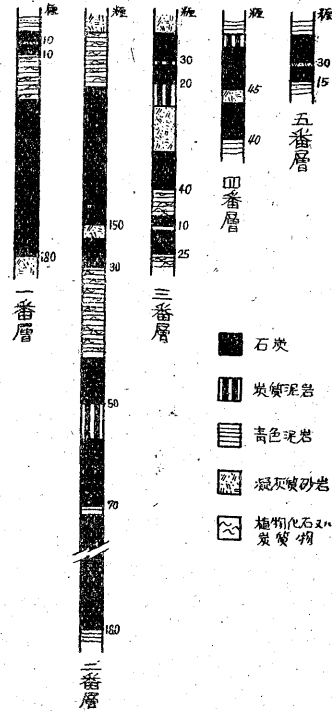


第2図 柱状図

図(3)に示した。5番層は薄く稼行不可能と思われる。

1番層……小石断層の西側では調査地区の西縁を略々南北に走り之を嘗て旧北宝炭砒が露天掘した。断層の東側では漸次薄くなる傾向を有し, 夾み2層を含み, 現在稻垣炭砒大盛坑で採炭して居る。2番層……小石夾炭層

柱状図(3)



第3図 柱状図

中最も有望な炭層であつて, 断層東側では略々南北に走り, 小向斜構造をなし, 炭層は断層の直ぐ東と調査地区の東端に露出しているが, 本層は嘗て旧新興炭砒壽坑及び稻荷坑並に旧愛國炭砒が採炭した。又断層西側では旧北宝炭砒壽坑, 炭坑が採炭し, 土地の人によつても諸所で小規模に掘られていた。3番層, 4番層……諸所に露出して居るが, 未だ採炭されて居ない。

c. 炭層分布状態

炭層は走向略々南北乃至北10°西を示し, 断層の西側では調査地区の西端を南北に連続して分布し, 断層の東側では小向斜構造を成し, 炭層は南北に2條の分布を示す。

[炭種及び炭質] 石炭は褐炭に属する。一見良質亞炭の観を呈し, 割合に多く水分を含み, 木質構造の見える部分もある。新鮮な時には稍々黒色光沢を有するが, 乾燥すれば光沢が無くなり, 小さく割れ, 薄く剥げる性質を示す。